

氏 名 厚 香苗

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1184 号

学位授与の日付 平成 20 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 香具師系露店商の民俗学的研究

論文審査委員	主 査 教授	常光 徹
	教授	山本 光正
	准教授	安室 知
	理事	篠原 徹(人間文化研究機構)
	教授	鈴木 正崇(慶應義塾大学)
	教授	八木橋 伸浩(玉川大学)

## 論文内容の要旨

日本の祝祭空間で露店を営む専門的な露店商は香具師（ヤシまたはコウグシ）、テキヤなどといわれる。そのような商人を本論では香具師系露店商と呼ぶ。本論の目的は、その香具師系露店商たちが「昔から」伝えているという慣行のうち、露店商いという生業活動を支えている慣行と、その意義をあきらかにすることである。

東京都区部東部において香具師系露店商はテキヤといわれている。本論では仮に東京会と呼ぶひとつのテキヤ集団と、その構成員たちのつたえる慣行を研究対象とする。東京会の構成員の間には「昔から」そうしていると説明される事象が伝わっている。そのなかから本論では二十一世紀初頭の東京都区部東部で、露店商いという生業活動を維持するために有効に機能していた慣行を分析する。

本論は7章から構成される。1章では研究目的を述べて研究史を概観する。ただし本論が研究対象とするような専門的露店商の現代的な研究は管見の限りみあたらない。したがって社会学など近接諸分野の研究成果や、研究書ではない一般書にも目をむける。2章では研究方法と、その限界について考える。本研究はフィールドワークから得られたデータに基づいている。しかし香具師系露店商という研究対象ゆえの調査の限界や、あきらかになったことを記述する際の制約がある。その限界や制約を確認する。

3章から6章は事例研究である。3章では東京会の集団構造と維持原理を考察する。東京会の構成員の間には二種類の親分子分関係がみられる。その二種類の親分子分関係によって東京会の集団構造は入れ子状構造となっている。また東京会の集団維持原理には血縁否定、序列間移動、新参者の恒常的受け入れという三つの特徴があることを指摘する。3章で論じる集団の構造と集団維持原理は4章以下でおこなう分析の前提になる。4章では東京会がもつ資源としての「なわばり」を事例に、東京都区部東部に複数存在する香具師系露店商集団が伝える「なわばり」をめぐる慣行をあきらかにする。香具師系露店商集団には「なわばり」という勢力範囲がある。通例「なわばり」とは排他的な性格を有しているものである。しかし東京都区部東部にみられる香具師系露店商集団の「なわばり」は排他的ではなく重なり合っている。この重なり合う「なわばり」を香具師系露店商はアイニワという民俗語彙で表現する。このアイニワの慣行について検討する。

5章では露店商いの際に無形の出店許可証のような役割をはたす「名乗り名」の慣行と、その機能をみていく。「名乗り名」は3章でみた集団構造を反映している彼らの間でのみ使用される名である。この「名乗り名」は香具師系露店商たちが仲間を見分けるための慣行であるが、それだけでなく混乱がおこりにくい祝祭空間の形成に寄与している。すなわち「名乗り名」の慣行とのかかわり方によって、祝祭空間にいる露店商は、一人前の香具師系露店商、一人前になっていない香具師系露店商、カギョウチガイ、カタギの四種に分類されている。祝祭空間を采配する立場にある一人前の香具師系露店商は、多種多様な露店商を、この分類によって把握する。そして各人と適切な社会的距離を保つように努めることで、混乱がすくない祝祭空間の運営を可能にしている。

6章ではテイタとよばれる祝祭空間の備忘録を読み解く。テイタはセワニンといわれる祝祭空間の責任者が作成して自宅で保管する記録である。その記述方法は粗雑で、記号のような書き方も多用される。したがって記録の作成者が何を書き留めたかったのかを理解するためには、香具師系露店商の慣行をめぐる知識が欠かせない。そこでフィールドワークから得られた知識をもとにして、テイタの内容の理解を試みる。この作業を通じて、彼らが自分たちの作り出す祝祭空間をどのように捉えているのかを検討する。

7章では3章から6章での議論の要点を確認したあと、東京会につたわる商いをささえる慣行の文化的特徴について論じる。6章までの議論であきらかになった露店商いをささえる慣行は、祝祭空間を創造するためのものである。そしていわゆる都市下層の貧困層に充実した生活をもたらす。まず祝祭空間の創造にかかる文化的特徴として、①周到なコンフリクト回避がおこなわれる点、②慣行を理解しているものが祝祭空間において少数派である点を指摘できる。つぎに香具師系露店商を都市下層の生業活動としてとらえ、その文化的特徴をみると、①自律的に働くことによって生活しているという充実感を商人にもたらず点、②他者との接触を増やすことで社会から孤立しているという感覚を鈍らせる点が注目される。香具師系露店商集団に加入することで血縁や地縁にもとづく他者とのかかわりが希薄になった人びとは、生活の手段を獲得するとともに再び地域社会に戻される。都市における貧困は普遍的にみられ、その貧困を根絶することは極めて困難である。目を背けることができないその現実のなかで、香具師系露店商の慣行は、ある種の社会保障のような役割を果たしてきたと考えられる。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、東京都区部東部のいわゆる下町に生きる「香具師系露店商」を対象として、彼らの露店商いという生業活動を支えている慣行と、その意義を明らかにしたものである。緻密なフィールドワークを通して、独自の世界を形成する「香具師系露店商」の生活実態を描き出すとともに、集団の構造や機能、維持原理等について分析を行い民俗学の新たな分野を切り開く成果をあげている。

全体の構成は、第1章「研究目的」、第2章「研究方法」、第3章「集団の構造と維持原理」、第4章「〈なわばり〉の運用」、第5章「〈名乗り名〉の継承方法と機能」、第6章「記録にみる祝祭空間」、第7章「結論」から成る。第1章では、研究の目的を述べて先行研究を概観し、第2章では、研究方法と「香具師系露店商」という研究対象ゆえの調査の限界や記述の制約について確認している。第3章から第6章は調査にもとづく事例を中心にした考察で、本論文の骨格をなす部分である。第3章と第4章は、「香具師系露店商」という社会集団の構造となわばりについて分析し、第5章および6章では、商いという生業的側面を「名乗り名」の機能と「祝祭空間」の仕切り方によって分析している。第7章は、各章での論点を確認したうえで「香具師系露店商」の文化的な特徴について述べている。

論文では、東京会（仮称）と呼ぶひとつの集団と、その構成員たちの伝える慣行を主な研究対象として分析しているが、つぎに挙げる諸点においてすぐれた成果をあげている。

「香具師系露店商」集団の社会が、二種類の親分子分関係（オヤブンとワカイシュウの関係、オヤブン相互の関係）を中核にして、集団が入れ子構造として成立していることを明らかにし、その集団の維持原理として、血縁否定、序列間移動、新参者の恒常的受け入れという三つの特徴があることを提示している。たとえば、親分相互の序列差から生れる親分子分関係は、序列間の移動によってはその立場が入れ替わることすらありえる。集団内部からの視点によるこうした考察は、村落社会における親分子分関係とは異なる独自の擬制的親子関係のあり方を明確に示したのものとして注目される。また、商いに伴う経済的資源である「なわばり」について、東京都区部東部に複数存在する「香具師系露店商」集団の慣行を分析し、興味深い結論を導き出している。通例「なわばり」とは排他的な性格をもつが、ここでは、ひとつの集団がいくつもの「なわばり」をもち、その「なわばり」は別の集団とも共有しているアイニワと呼ばれる重なり合う「なわばり」のあり方を発見している。集団の共同管理の場としてのアイニワの運用と業態差による「すみわけ」が、集団間の軋轢やときには抗争を回避し、縁日の賑わいを創り出す原動力になっているとの考察は独自の観点で示唆に富む。厚氏は、彼らのモノを売るという側面と同時に、賑わいを演出する人々であることを強調しており、祝祭空間の担い手としての「香具師系露店商」の姿を浮かび上がらせている。

露店商いの際に用いられる「名乗り名」は、「香具師系露店商」たちが仲間を見分けるための慣行であり、「名乗り名」とのかかわり方によって「一人前の香具師系露店商」「一人前になっていない香具師系露店商」「カギョウチガイ」「カタギ」の四種に分類される。これによって、一人前の香具師系露店商は多種多様な露店商を把握し、それぞれとの適切な社会的距離を保つとともに、混乱の少ない祝祭空間の運営を可能にしている点を指摘している。また、祝祭空間においては、セワニンと呼ばれる責任者によってテイタと、称する備忘録が作成される。記述方法は粗雑で記号のような書き方も多用されるため、何を書き留めてあるのかを理解するには、「香具師系露店商」の慣行をめぐる知識が欠かせない。厚氏は、フィールドワークから得られた経験と知識をもとに出店場所や出店者の商品等に関する情報を読み解き、賑わいを演出するための具体的な方法を明らかにしてい

る。

本論文では、東京都区部東部の下町の「香具師系露店商」を対象としているが、今後の課題としては、他の地域の「香具師系露店商」との比較、あるいは歴史的観点の導入等いくつかの問題が残されている。こうした点については、さらに調査・研究を深化すべきだが、しかし、全体としては、困難をともなう調査を精力的に展開し、「香具師系露店商」の集団内部の構造や機能等を実証的に分析して、すぐれた成果をもたらした点は高く評価される。また、民俗学においては、研究成果の乏しい分野であり本論文は学史的にも重要な位置を占めるものと思われる。

以上によって、審査委員は一致して博士学位授与に値する論文であると判定した。